

木曽川



木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
冬号は、東濃ヒノキで知られる中津川市北部の
山林と運材の歴史を中心に、
歴史ドキュメントでは、
「明治改修」シリーズの第五編をお届けします。

岐阜県中津川市

ふるさとの街・探訪記

豊かな森と清流に恵まれた 中津川市北部

エリア・リポート

川狩りの川と流域の砂防 ～付知川・川上川・加子母川～

気ままに JOURNEY

大衆芸能の舞台を訪ねて 芝居小屋の息づかいを感じる旅

歴史ドキュメント

横満蔵から始められた 木曽川下流改修

TALK&TALK

『佐屋川の流れと人々の生活』

民話の小箱

水のない谷





豊かな森と清流に恵まれた

中津川市北部

中津川市北部は、東濃ヒノキの生産地として名高い山間地で、かつて恵北と呼ばれていました。中世以降、苗木遠山氏の勢力下にあつて、江戸時代には苗木藩と尾張藩の領地でした。現在は、農林業に加え、自然と伝統を生かした観光開発が進んでいます。

東濃の中心都市・中津川市

岐阜県の東端に位置する中津川市は、東に木曽山脈が連なり、西側は飛騨の山々が迫る豊かな自然に抱かれた東美濃の中心都市です。市の中央を東西に貫流する木曽川に中津川、付知川など多くの支流が注ぎ込んでいます。

中津川市の木曽川以北は、裏木曽県立国定公園が広がる木曽ヒノキなどの国有林が多い山林地帯です。北東部は、御獄山の南から続く阿寺山脈を

はさんで長野県

と接し、西側は加茂郡と接しています。唐塩山を源とする付知川が地域中央を南流するほか、東部を川上川が南流して木曽川に注いでいます。また、加子母地区の西を流れる加子母川(白川)が、加茂郡に流れて飛騨川に合流します。平成一七年中津川市と合併する以前、この地域は恵那郡に属する付知町・福岡町・坂下町・加子母村・川上村・蛭川村の三町三村があつて、恵那郡の北部であることから恵北といひ室町時代からヒノキの産地として知られ、裏木曽とも呼ばれてきました。

縄文草創期の柵の湖遺跡

縄文遺跡としては、坂下柵の湖遺跡で爪型文土器や斜縄文土器などが発掘され、縄文草創期の貴重な遺跡となっています。このほか前期の福岡野尻遺跡、中期の坂下門垣戸遺跡、後期の福岡下島遺跡などが知られています。弥生時代の遺跡は各地に点在します

が、平坦地の少ない山間部であり、いずれも小規模なもので、古墳も坂下に十基が存在する以外には確認されていません。

東濃を支配した遠山氏

平安時代末期には、恵那郡の多くが遠山庄であつたと言われていますが、鎌倉幕府成立間もない建久六年(一一九五)、源頼朝は遠山庄の地頭職を加藤次景廉に与えました。景廉は、頼朝の伊豆挙兵に参加し、その後も幕府設立に至る戦役の数々で戦功を挙げ、その恩賞としてこの地を賜わっています。景廉の子景朝の時に遠山氏を名乗り一族は恵那郡一帯と土岐郡、木曽の一部を支配しました。遠山氏一族

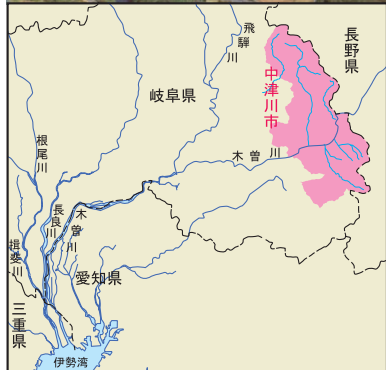


は、各地に分散し統治していきますが、特に有力だったのは、岩村、明知、苗木に拠った三氏で、木曽川以北の地は、苗木遠山氏の勢力下にあつたようです。一六世紀中頃の遠山氏は、美濃頼藤氏に仕えていましたが後に織田信秀・信長の傘下に入り、遠山直廉の死後は遠山友忠が苗木城と領地を受け継いでいます。

しかし豊臣政権下では、東濃支配を



苗木城跡



ふるさとの街・探訪記



三浦山・加子母・付知・川上村山絵図

伐によつて禿げ山が増え、そのまま放置出来ない状態になったため、寛文五年（一六六五）尾張藩は、一切の入山を禁じた留山制を実施し資源保護にのりだしました。

しかし、寛文の改革は、規制とは裏腹に藩財政の窮乏から売木が増すなど、十分な成果をあげるには至らず、宝永・正徳期には留山・巢山の拡張、伐採を禁じる停止木の指定を行うなど制限を強化し、享保期に至つて藩用材の止むを得ないものでさえ枯木・損木から採材するという徹底した禁伐政策を断行しました。

一方で伐採の規制は三ヶ村の住民に過重な負担をかけるものでした。三ヶ村は、貢租を米のかわりに木年貢で納めていましたが、伐木制限により木年貢を納めることができなくなり、享保一四年（一七二九）から米納に切り替えられました。もともと農地が少なく自給米にも不足し他所から買い入れていた村にとつて、年貢米を供出することは大変困難なことでした。

こうしたことから、田畑の開墾に目が向けられて、用水路の新設、増築工事が盛んに行われようになりました。文政十一年（一八二八）、山間峡谷の難

目指す金山城主・森長可に苗木城を奪われ、友忠と嫡子友政は徳川家康を頼つて落ちのび、遠山氏の名は東濃からいったん消えてしまいました。

こうして江戸時代の当地方は、同一地域であつても苗木藩領と裏木曾三ヶ村では、全く異なった体制で統治されることになりました。

一方で伐採の規制は三ヶ村の住民に過重な負担をかけるものでした。三ヶ村は、貢租を米のかわりに木年貢で納めていましたが、伐木制限により木年貢を納めることができなくなり、享保一四年（一七二九）から米納に切り替えられました。もともと農地が少なく自給米にも不足し他所から買い入れていた村にとつて、年貢米を供出することは大変困難なことでした。

こうしたことから、田畑の開墾に目が向けられて、用水路の新設、増築工事が盛んに行われようになりました。文政十一年（一八二八）、山間峡谷の難

伐によつて禿げ山が増え、そのまま放置出来ない状態になったため、寛文五年（一六六五）尾張藩は、一切の入山を禁じた留山制を実施し資源保護にのりだしました。

しかし、寛文の改革は、規制とは裏腹に藩財政の窮乏から売木が増すなど、十分な成果をあげるには至らず、宝永・正徳期には留山・巢山の拡張、伐採を禁じる停止木の指定を行うなど制限を強化し、享保期に至つて藩用材の止むを得ないものでさえ枯木・損木から採材するという徹底した禁伐政策を断行しました。

一方で伐採の規制は三ヶ村の住民に過重な負担をかけるものでした。三ヶ村は、貢租を米のかわりに木年貢で納めていましたが、伐木制限により木年貢を納めることができなくなり、享保一四年（一七二九）から米納に切り替えられました。もともと農地が少なく自給米にも不足し他所から買い入れていた村にとつて、年貢米を供出することは大変困難なことでした。

こうしたことから、田畑の開墾に目が向けられて、用水路の新設、増築工事が盛んに行われようになりました。文政十一年（一八二八）、山間峡谷の難

こうしたことから、田畑の開墾に目が向けられて、用水路の新設、増築工事が盛んに行われようになりました。文政十一年（一八二八）、山間峡谷の難

伐によつて禿げ山が増え、そのまま放置出来ない状態になったため、寛文五年（一六六五）尾張藩は、一切の入山を禁じた留山制を実施し資源保護にのりだしました。



苗木遠山史料館

苗木藩と裏木曾三ヶ村

家康の庇護を受けていた遠山友政は、関ヶ原の戦いに先立ち東濃攻略の命を受け、わずかな手勢をともなつて旧領に入り、旧臣や農民を募つて豊臣方から苗木城を奪回しました。この軍功によつて、遠山氏は恵那郡、加茂郡の旧領を与えられ江戸時代を通して苗木藩として存続していきます。中津川地域の苗木藩領は、苗木・福岡・坂下・蛭川地区に相当します。

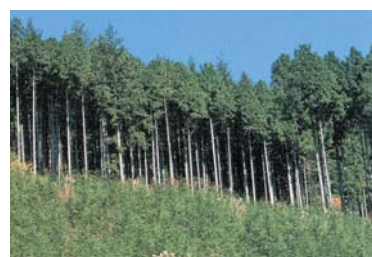
尾張藩の森林政策

裏木曾は古くから良質のヒノキを産出する地として知られており、文安五年（一四四八）南禅寺仏殿用材や文正元年（一五七三）東山殿山莊造営材がこの地より刈り出された記録が残っています。

しかし、寛文の改革は、規制とは裏腹に藩財政の窮乏から売木が増すなど、十分な成果をあげるには至らず、宝永・正徳期には留山・巢山の拡張、伐採を禁じる停止木の指定を行うなど制限を強化し、享保期に至つて藩用材の止むを得ないものでさえ枯木・損木から採材するという徹底した禁伐政策を断行しました。

一方で伐採の規制は三ヶ村の住民に過重な負担をかけるものでした。三ヶ村は、貢租を米のかわりに木年貢で納めていましたが、伐木制限により木年貢を納めることができなくなり、享保一四年（一七二九）から米納に切り替えられました。もともと農地が少なく自給米にも不足し他所から買い入れていた村にとつて、年貢米を供出することは大変困難なことでした。

こうしたことから、田畑の開墾に目が向けられて、用水路の新設、増築工事が盛んに行われようになりました。文政十一年（一八二八）、山間峡谷の難



ヒノキの美林

え、そのまま放置出来ない状態になったため、寛文五年（一六六五）尾張藩は、一切の入山を禁じた留山制を実施し資源保護にのりだしました。

しかし、寛文の改革は、規制とは裏腹に藩財政の窮乏から売木が増すなど、十分な成果をあげるには至らず、宝永・正徳期には留山・巢山の拡張、伐採を禁じる停止木の指定を行うなど制限を強化し、享保期に至つて藩用材の止むを得ないものでさえ枯木・損木から採材するという徹底した禁伐政策を断行しました。

一方で伐採の規制は三ヶ村の住民に過重な負担をかけるものでした。三ヶ村は、貢租を米のかわりに木年貢で納めていましたが、伐木制限により木年貢を納めることができなくなり、享保一四年（一七二九）から米納に切り替えられました。もともと農地が少なく自給米にも不足し他所から買い入れていた村にとつて、年貢米を供出することは大変困難なことでした。

こうしたことから、田畑の開墾に目が向けられて、用水路の新設、増築工事が盛んに行われようになりました。文政十一年（一八二八）、山間峡谷の難

え、そのまま放置出来ない状態になったため、寛文五年（一六六五）尾張藩は、一切の入山を禁じた留山制を実施し資源保護にのりだしました。

しかし、寛文の改革は、規制とは裏腹に藩財政の窮乏から売木が増すなど、十分な成果をあげるには至らず、宝永・正徳期には留山・巢山の拡張、伐採を禁じる停止木の指定を行うなど制限を強化し、享保期に至つて藩用材の止むを得ないものでさえ枯木・損木から採材するという徹底した禁伐政策を断行しました。

一方で伐採の規制は三ヶ村の住民に過重な負担をかけるものでした。三ヶ村は、貢租を米のかわりに木年貢で納めていましたが、伐木制限により木年貢を納めることができなくなり、享保一四年（一七二九）から米納に切り替えられました。もともと農地が少なく自給米にも不足し他所から買い入れていた村にとつて、年貢米を供出することは大変困難なことでした。

こうしたことから、田畑の開墾に目が向けられて、用水路の新設、増築工事が盛んに行われようになりました。文政十一年（一八二八）、山間峡谷の難

苗木藩の「お立山」

苗木藩は、江戸時代を通して転封・移封などによる領地の変更がなく初代遠山友政から一二代友禄まで続いて明治維新を迎えています。これは岐阜県において唯一で、全国的にも珍しい例となっています。

苗木藩領は恵那・加茂郡に三七カ村でしたが、木曾川・飛騨川流域の川筋に沿つて点在する高一〇〇石に満たない村が半数以上で、藩の総石高一万石余の小藩でした。このため、藩は成立直後から新田開発を盛んに奨励し年貢の優遇や種子の貸し出しなどの政策をとっています。その成果として藩政確立期の四代友春までの総開発高は、表高の四〇％以上に及んでいます。

貢租以外の財源として重要であつたのは山林からあがる収益でした。東濃一帯のすぐれた山林のほとんどが尾張藩に占められたとはいえ、領内の山林は重要な財源で、苗木藩でも厳しい山林政策をとっていました。藩では、優良林地を藩有林として「お

ふるさとの街・探訪記



廃仏毀釈(三十三観音)

も廃仏を意図したものではなかったものの、その解釈と進め方は藩によってまちまちで、いくつかの藩で激しい廃仏運動が展開されました。なかでも苗木藩は他に類を見ない程に徹底した廃仏毀釈を押し進め、明治三年(二八七〇)廃寺や僧の

明治維新によって成立した新政府は、王政復古による神道国教政策を掲げて、慶応四年(一八六八)三月「神仏分離令」を布告しました。神社における社僧や別当職を廃して、古来からの風習であった神仏混合を禁止したこの布達は、必ずしも廃仏を意図したもの

廃仏毀釈を進めた苗木藩

立山」に指定して、農民の立ち入りを禁止しています。なかでも福岡地区は、良材の林地を多く抱えていたもので、慶長一五年(一六一〇)駿府城普請用材三千本を供出するなど大規模な伐採が行われました。刈り出された木材の搬送は尾張藩と同様、付知川を流送し木曾川を下って錦織綱場(八百津町)に留められました。付知川は尾張藩の用材が大量に流送されるため、苗木藩は閑散な時期を待って割り込んで川入れましたようです。

江戸時代、地域の農民を困窮させながらも、厳しい伐木規制が行われてきたおかげで、裏木曾には豊かな森林資源が残されました。加子母村は村民に山林の個人所有を奨励し植林撫育の風潮を育てていきます。坂下村では素封家曾我五郎十郎が私財で苗木藩から払い下げを受けた山林を村の共有財産

先人が残した美林と景観

独立してしまっています。川上村は分離の理由に、山林管理が行政の重点とならないことへの不安といった財政的な側面に加えて、江戸時代からの民情の違い、特に坂下村、上野村の神道に対して、川上村は一村一寺の仏教であることをあげています。

還俗などの通達を次々と出し、領内の一五カ寺の廃寺、領民の改宗を実行しました。その背景には藩主遠山友禄が平田国学に傾倒し、藩内に平田門人が多かったことがあります。こうした苗木藩の動向は、苗木藩領と裏木曾三ヶ村との民情の違いに輪をかける形になっていきます。例えば、明治二二年(一八八九)町村制施行により、坂下村、上野村、川上村が合併して坂下村が発足

廃藩置県 →	明治の大合併 (市制町村制施行(明治22年~))	昭和の大合併	平成の大合併
尾張藩	中津川村 駒場村 手賀野村	明治22年→中津川町 明治30年→中津川町	昭和27年→中津川市
苗木藩	日比野村 瀬戸村 上地村	明治7年→苗木村 明治8年→瀬戸村 明治22年→苗木村 明治23年→苗木町	昭和29年→中津川市
尾張藩	茄子川村 千旦林村 落合村	明治30年→坂本村 昭和31年	中津川市
岩村藩	阿木村 飯沼村	明治30年→阿木村 昭和32年	中津川市
尾張藩	湯舟沢村 馬籠村 山口村	明治7年→神坂村 明治7年→田立村と合併 明治14年→山口村	昭和33年 昭和33年分村編入→山口村 (神・馬籠・荒町が山口村と合併)
苗木藩	坂下村 上野村 川上村	明治38年→坂下村 明治44年→坂下町 明治22年→坂下村 明治38年→川上村	坂下町 川上村
尾張藩	加子母村 付知村	明治30年→付知町	加子母村 付知町
苗木藩	福岡村 高山村 田瀬村	明治22年→福岡村 明治30年→福岡村	昭和41年福岡町 福岡町
幕領	下野村	福岡村	福岡町
苗木藩	蛭川村		蛭川村

中津川市の合併の経緯

としたことで財政に大きな恩恵がありました。このほか蛭川村が、植林王金原明善の教えを受けた西山熊吉の指導で村有林の育成に努めるなど、それぞれの村が独自の方法で山林経営を行い財政基盤にできました。現在も最高級品「東濃ヒノキ」ブランドとして、また木工・工芸品や住宅建築などの振興によって、この地域を代表する産業であり続けています。

天然の山藪を復活させて紡いだ夕森紬が特産品となっています。以前は交通が不便な地域でしたが、国道二五七号など道路網が整備されたことで、行楽地として注目されるようになり、川沿いに多くのキャンプ施設がつくられ、道の駅「花街道・付知」「加子母」「きりら坂下」「五木のやかた・かわうえ」が地域観光の窓口となっています。



ローマン溪谷オートキャンプ場

平成一七年恵北の三町三村は、中津川市と合併し、新たなスタートをきりました。農業・林業分野で地域の特色を生かしたブランド品の育成、自然と歴史資源を生かした広域観光地としての充実に加え、企業誘致や通勤圏の拡大など市街地との交流による活性化が期待されています。

参考文献

- 『付知町史』昭和四九年
- 『川上村史』昭和五八年
- 『加子母村誌』昭和四七年
- 『福岡町史』上・下巻 平成四年
- 『角川日本地名大辞典』角川書店 昭和五五年
- 『中津川市市勢要覧』平成一八年

AREA REPORT

岐阜県中津川市

川狩りの川と流域の砂防 ～付知川・川上川・加子母川～

中津川市北部を流れる付知川・川上川・加子母川は、古くから木材流送に利用されてきました。流域の山からは膨大な量の立木が伐採され、山林の荒廃による土砂災害や河川への土砂流出が増大していました。

付知川の川狩り

加子母地区の唐塩山を水源として中津川市の北部を貫流して木曽川に注ぐ付知川は、別名「青川」とも呼ばれた清流です。山の緑を写しこんで澄みわたる水は岐阜県の名水五〇選にも選ばれています。

かつての付知川は、上流の山林から伐採されたヒノキの良材を木曽川まで流して運ぶ「川狩り」が行われた川でした。

付知の山からの木材搬出の歴史は、



付知川

延文四年（一三五九）伊勢神宮のご神木が「美濃国付茅山より」刈り出されたとあるのが最古の記録で、今でも伊勢神宮の式年遷宮の御用材として付知川上流には神宮備林（現・木曽ひのき美林）が守り育てられています。江戸時代には、膨大な量の木材が付知川を下って木曽川に流されていきました。

明治以降も付知川の川狩りは続き、昭和初期まで木遣唄に合わせて大木を流す大勢の男達の勇壮な姿が見られました。付知川と木曽川の合流地点より少し下流に大井ダムが建設されることにより、流送に替る木材運送の手段として北恵那鉄道（中津町～下付知）が大正一三年（一九二四）開通、さらに昭和二年（一九三七）下付知駅から付知川上流に延びる付知森林鉄道が建設され、川狩りはその歴史を閉じました。

川狩りは、水量が安定する秋に行われ、土地の人々にとっては季節を感じさせる行事でもありました。夏の間に伐採して集めておいた材木を一本ずつ川に流していきます。川が細いので筏

に組んで流すことはできません。

水深が浅く水量が少ない上流部では、ただ流すだけでは材木は流れて行かないため「堰出し」という方法が使われました。流送する木材の一部を使って組んだ堰で川をせき止め水面を上昇させて材木が浮かんた状態にして、その水量と水勢を利用して材木を流します。堰は水路の中央に材木を通す門戸を設け、その両側に脇堰を築いて川をせきとめます。材木を流し終わった堰は、バラバラにして下流に流し再び組み立てていきます。堰を造っては壊してまた下流で組み立てる、この繰り返しで川を下っていく、その作業には何百人という人手が必要だったようです。堰と堰の間隔は、川の勾配や水量に合わせて変わりますが、付知川で実際に川狩りを体験した人の話では、二〇〇～三〇〇mくらいだったそうです。

付知川では、この堰を「瀬木」と呼んでいましたが、こうした呼称や構造は、地域や時代によって違いがありました。付知川と同じく阿寺山脈から発す



堰出し「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」（東濃森林管理署蔵）より

る加子母川は、加子母地区の西を南流して加茂郡に入って白川と名前を変え飛騨川に注ぎます。この川も川狩りに利用された川でしたが、『加子母村誌』には、加子母川の川狩りでは土・草・木の葉・石などを用いて堰を作りそれを切つては流した、材料の芝や木の葉はその場で買い上げていた、と書かれています。付知川の瀬木と比べると、堰出しの方法が地域によってさまざまであったことがわかります。

川上川と森林鉄道

奥三界山から木曾川に注ぐ川上川は、断層崖を流下する急流で、上流部では一つ滝・アゼ滝などいくつもの滝をつくっています。なかでも竜神の滝はその昔、滝壺に住んでいた白竜が、突然天まで駆けのぼったかと思うと激しい雨と雷が村を襲ったという竜神伝



川上川

説が伝わる滝で、奥深い山中にあつて近づき難い神秘的な滝でした。今では、散策路が整備された観光スポットとして、落差約一二m

の水量豊かで豪快な姿が見る人の目をひきつけます。



竜神の滝

滝の近辺には、キャンプ場もありシーズンには多くの観光客で賑わっています。

川上川も江戸時代から材木の流送が行なわれてきた歴史を持っています。その川上川の運材も大正から昭和初期には鉄道による陸送に切り替わっていました。

夕森公園近くの川上川沿いに、森林鉄道・坂川鉄道(中央本線・坂下駅)川上村丸野駅を記念してディーゼル機関車がモニュメントとして展示されています。大正一五年(一九二九)に開通した坂川鉄道は、旅客営業も兼ねて一日三往復程度が運行されていました。

川上川流

域にも神宮備林があつたので、鉄道の経営は川上村と宮内省が行っていたそうです。昭和一九年林野局に委譲されて、丸野



ディーゼル機関車の展示

駅から川上川上流・奥三界山の麓まで延びていた坂川森林鉄道の一部となり、昭和三十一年(一九五六)まで運行されていました。

山林の荒廃と土砂災害

川狩りの行われた河川の流域では、江戸時代初期に材木の濫伐が行なわれ、相当な範囲に渡って山林が荒廃していたことから、かなりの土砂災害が起こつていたと思われますが、被害についての記録は少ないようです。これは人口や社会資本の集積がまばらであつたせいでしょう。

『川上村史』は、「川上川の洪水は、伐木後の大木や枝葉が水をふせぎ、鉄砲水となって材木を押し流し、蛇抜けして立木・土砂を押し出すことが多かった」として、江戸時代の水害記録四件を挙げています。

「享保元年(一七一六)山内蛇抜大洪水、

嶋部落田畑全滅、家屋五軒流失。

寛政元年(一七九六)田畑砂入。

安政元年(一八五四)嶋部落田筋変わる。

家屋被害一軒。田畑流失、損じた者

一人。

安政四年(一八五七)豪雨蛇抜立木・

材木押し出し田畑多数。家屋二四

流失、死者三人、馬二匹流さる。」

特に安政四年の水害は、付知村で何百カ所もの山抜けが発生し全村にわたつて被害が出たほか、加子母村でも大きな被害の記録があり、三ヶ村は共

同で太田代官所宛に救済の嘆願書を出しています。

また、『付知村史』には、「…山林の荒廃は河川の氾濫をさそい、河川敷を次第に拡大していった。大ヶ平地区をはじめ、白沢、あらま、松原地区も幕末までには次第に上段を開墾し…」とありますから、付知川への土砂流入が相当なものであつたことが伺われます。

このように、記録こそ少ないもののこの地域で土砂災害が頻繁に発生していたことは、流出する土砂の抑制を重視したデ・レーケが視察に訪れていることからわかります。

デ・レーケの裏木曾視察

デ・レーケがこの地を訪れたのは、明治一三年(一八八〇)八月で、木曾谷各地の視察から駒ヶ岳登山を経た後の、六日、七日です。ここでもデ・レーケは、その場で随行の役人に砂防についての提言をしています。この二日間を『岐阜県志水史』から抜きだすとおよそ次のような行程でした。

八月五日妻籠の工事箇所を検分したデ・レーケは中津川に泊まり、六日中津川を発つて苗木城山に登り四方の山々を見て禿げ山が多いことを目の当たりにします。付知村に入つて付知川の南岸で長さ二百八拾間、高さ平均七間余にわたつて河岸が欠壊し土砂が流入していたので改修の工法を示しました。翌七日は、付知村内の崩落箇所

AREA REPORT



嫌谷入り口付近の堰堤



デ・レーケの指導とされる嫌谷堰堤

同じような谷が、嫌谷、和泉谷、大洞谷、木曽路谷、空洞の五カ所あるが、いずれも白谷と同様であるとして視察を終えています。
このようにデ・レーケは、滞在し



加子母川

数カ所を検分して工法を提示した後、加子母村を訪れ村から一里ほどのところにある白谷に入っています。ここでも山崩れが多いのでさまざまな工事方法を示し、加子母村内には

た二日間に付知・加子母地区の各地で砂防施設の必要性に言及しており、加子母地区の嫌谷では、実際に彼の指導によって工事が行われた足跡がはっきり残っています。
加子母の集落から少し山側に入ると地芝居の舞台として有名な明治座の派手なのが見えてきます。その明治座の向かい側が、嫌谷の砂防施設を中心に整備された「やんたに公園」の入り口で、芝生になっている入り口付近では陽気の良い日に弁当を広げる家族連れなどが散見されます。その奥に近年改良された大規模な堰堤がそびえており、ここから上流に向かって散策路となっています。上流にはデ・レーケの指導とされる石積みの流路工や溪間工一三基などがほぼ完全な形で残り、現在も砂防施設としてその役割を果たしている様子を見ることができます。

デ・レーケは、翌明治一四年に再度この地を訪れています。エッセルに宛てた手紙に「八月一〇日(中津川から)七里ほど、北方へ、飛驒との境界まで行き、住民自身によって、造られたり、支払われた砂防の一部を視察しました。」とあり、飛驒と

の境界といっているので加子母を指しているかと推察されます。デ・レーケが関心を寄せた「住民による砂防」が具体的に何であったかわかりませんが、付知川流域吉本谷や川上川流域境沢谷で明治初期の築造ではないかと思われる巨石積堰堤が見つかったのではとも言われています。

川狩りの川から観光の川へ

川狩りが行われた河川の流域では、現在に至るまで大小さまざまな治山治水事業が営々と続けられてきました。付知川流域では大谷・小屋郷砂防工事(昭和五〇年竣工)、根屋尾谷復旧治山工事(平成六年完了)、熊倉谷砂防堰堤(平成五年竣工)、宮島の大崖復旧治山工事(平成八年完了)など数多くの砂防工事が行われてきました。加子母川流域では、昭和四三年度から五カ年計画の荒廃復旧工事が行われ、川上川流域も各所に堰堤が設けられています。

本川の付知川・加子母川は、護岸の整備が進み川幅も広がって、かつての川狩りを偲ばせる面影は少なくなっています。一方で、澄み切った清流と豊かな森が四季折々に変化する美しい景観を求めて都会から多くの人が訪れる観光の川として地域振興の一翼を担うようになってきました。加子母川上流の乙女溪谷や付知



付知峡オートキャンプ場



川の付知峡、ローマン溪谷など、キャンプ場や景勝地を巡る遊歩道といった施設が充実したアウトドアレジャーのフィールドとして川遊びのメッカとなっています。また、鮎釣りのシーズンには川のあちこちで竿を振るう釣人でも賑わいます。

江戸時代より木材の搬送で都市形成に貢献してきた川が、今は都会から訪れる人々の心を癒やし潤いをあたえてくれる川となっています。

参考文献

- 『付知町史』昭和四九年
- 『川上村史』昭和五八年
- 『加子母村誌』昭和四七年
- 『付知町制一〇〇周年記念誌』平成九年
- 『川に生きる』水運と漁労
- 岐阜県博物館 一九九四年
- 『近世林業史の研究』所三男 昭和五五年
- 『岐阜県治水史』下巻 昭和二八年

気ままに
JOURNEY

岐阜県中津川市

大衆芸能の舞台を訪ねて 芝居小屋の息づかいを感じる旅

郷土芸能を今に残す街

中央道自動車道の中津川インターチェンジを降り、国道二五七号を一路北へ。国道に伴走するかのように、付知川が穏やかな流れを見せています。

山と清流に恵まれた東濃地方は、江戸時代から地芝居の盛んなところ。農作業や山仕事に明け暮れる毎日、潤いをもたらしてくれたのが歌舞伎狂言をはじめとする地芝居だったのでしょう。地芝居はまさに人々の手によって創りあげられた大衆のための芸能でした。そんな大衆芸能も、戦後の農村の都市化やテレビの普及などにより、全国各地の伝統芸能が廃れていきましました。東濃地方の大衆芸能も同じ道をたどりましたが、地元の人々の並々ならぬ努力によって伝承され、昔日の面影を残す数々の芝居小屋が今も現存しています。

音曲にあわせ洒脱に繰り広げられる歌舞伎狂言の世界。そんな大衆芸能を訪ねて、中津川市を旅してみましよう。

子供歌舞伎に湧く明治座



明治座

最初に目指したのは、東濃の地芝居の中心的な役割を担ってきた加子母地区の明治座です。ここは、明治二十七年（一八九四）に村人たちの手によって建設された芝居小屋。本格的な回り舞台にセリ、両花道や二階席まである珍しい劇場形式の豪華な農村舞台で、昭和四七年（一九七二）七月一二日に岐阜県指定重要有形民俗文化財に指定されました。上演される子供歌舞伎は、きりりと凛々しい大人顔負けの名演技。観客たちは、かわいい子どもたちの仕草に惜しめない拍手を送っているようです。

そんな明治座の興行は、地芝居ばかりではありません。クラシックコンサートや映画上映、イベント公演など、さまざまな催しが開かれており、伝統

を守りながらも、現代のエンターテインメントの拠点として、新たな道を歩き始めたようです。加子母にはほかにも、国指定天然記念物でもある樹齢千数百年を越す加子母のスギ、それに見守られるように佇む加子母大杉地蔵尊、平家物語にも登場し、鎌倉幕府創建に貢献したといわれる文覚上人の墓など、見どころは盛りだくさん。そんな史跡の一つひとつに、加子母地区の歴史の深さを感じることがができます。



加子母のスギ

この地方ならではの地芝居

加子母の明治座とともに、東濃の地芝居を語る上で欠かせない芝居小屋がもうひとつ。福岡地区にある常盤座です。明治座に続き明治三四年（一九〇一）に落成。現在も地元常盤座歌舞伎保存会の定例公演や各種文化事業を楽しむことができます。

いくつもの芝居小屋が昔ながらの姿をとどめ、今も役者が舞台に立つ。岐阜県の地芝居の中心的な役割を担う中津川市は、文化と芸術の薫り高い街。幾多の情熱、様々なドラマを静かに受けとめて佇むその小屋は、今も昔も変わることなく訪れる者の心を弾ませてくれる。

稽古を積み、時間をかけて創りあげる芝居を、演じる人と見る人が共に楽しむ地芝居は、黙々と農作業や山仕事に打ち込むこの地域の人々の気質にあっているでしょう。



常盤座

東濃地方の地芝居の特色は、江戸にも上方にもない、面白い「型」にあります。中山道を上り下りした役者衆の影響を受けてか江戸の芸風と上方の芸風が入り混り、独自の「型」が紡ぎあげられたようで、本役者のまねごとではない面白さが評価されています。

地芝居で有名なこの地域はまた、日本屈指のラジウム含有量のローソク温泉をはじめとする温泉があります。ひよっとしたらその昔、地芝居の役者さんや裏方さんたちが疲れた身体を温めたことでしょう。

中津川市の歳時記

◆ 杵 振 り 祭 り ◆

4月16日に直近の日曜日

五穀豊穡を願って奉納される杵振り踊りは、岐阜県の重要無形民俗文化財に指定されています。囃子に合わせ杵を操り、約2kmの道のりを安弘見神社を目指して練り歩きます。鮮やかな赤、黄、青色の笠と衣装を身にまとい、幾百年の伝統を受け継ぐ杵振踊り。【開催場所】安弘見神社(蛭川)



◆ な め く じ 祭 り ◆

毎年旧暦7月9日

加子母の大杉地蔵尊のたもとにある文鏡上人の墓に、旧暦の9月7日(九万九千日)の夜になるとどこからともなく無数のなめくじが群がります。若き日の文鏡上人が恋した女性、袈裟御前の化身といわれています。この日に参拝すると九万九千日参拝したのと同じご利益があるといわれ、多くの人が参拝に訪れます。【開催場所】加子母大杉地蔵尊



イベントカレンダー

・ 桜の湖さくらまつり	4月第3土曜日
・ ひとつばたご祭り	5月中旬
・ 納涼花火大会	8月12日
・ なかつがわ夏まつりおいでん祭	8月13日
・ つけま夢まつり	8月14日
・ かわうえふるさとまつり	8月14日
・ 与三郎まつり	8月14日
・ 加子母総社水無神社例祭	9月23日
・ 花馬まつり	10月第2日曜日
・ ひるかわMAIKA祭	11月3日



● 交通のご案内 ●

◆ 名古屋方面からお車をご利用の方	
名古屋IC	中津川IC
東名高速道路・中央自動車道 (約55分)	
◆ 名古屋方面から公共交通機関をご利用の方	
名古屋駅	中津川駅
JR中央本線(約80分) JR特急しなの(約50分)	

● お問い合わせ ●

◆ 中津川市役所 ◆

〒508-8501 岐阜県中津川市かやの木町2番1号
TEL 0573-66-1111 <http://www.city.nakatsugawa.gifu.jp/>



常盤座の舞台

子々孫々、受け継がれる地域の宝

福岡地区から西へ進むと花崗岩の産地として名高く、ストーンミュージアム博石館がある蛭川地区に入ります。この地区にも芝居小屋、蛭子座があります。明治三四年に地元住民の手によって建設されたのが始まりで、村からは一銭の補助も受けないうで村民個々の寄付により完成させた心意気に、地芝居を後世へ伝えようとする人々の誇りと伝統の重さを感じることができます。

身分制度のきわめて厳しかった江戸時代、芝居の上とはいえ、一般農民が着ることを許されていないような豪華な衣装をまとい、大小の刀を差して武士にも大名にも身分の高いお姫様にも変身できる芝居は、格別の喜びだったのでしょうか。とはいえ、それも幕府

の禁制を潜り抜けてのこと。質素を旨とする江戸時代。地芝居や人形芝居は建前として禁止されていたが、そこは知恵をひねり出し、村の祭りに神様に奉納する名目や、雨乞いや病

気平癒などの祈願を名目に続けてきました。近世に生まれた大衆芸能が今もなお、人々に愛され、伝え守り続けられていることから見ても、歌舞伎や人形浄瑠璃芝居が庶民にとっていかに大切で魅力的な芸能であったかを知ることができます。

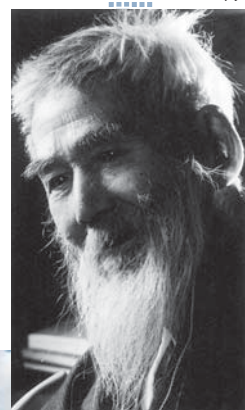


蛭子座

昔は中山道を通る人の道標だったといえます。

清流と緑が育んだ芸術家

地芝居という芸能を生み出した東濃地方は、日本の近代美術史に大きな足跡を残した画家をも世に送り出しました。画家の名は、熊谷守一。静かで自然美豊かな付知川沿いに、熊谷守一記念館があります。熊谷守一は付知町出身で、身のまわりの虫や猫やチョウなどをもモチーフに、色や形を単純化した独特のスタイルを確立しました。「東洋のピカソ」と賞賛されながら名譽、名声に頓着せず、昭和四二年(一九六七)には文化勲章を辞退。九七歳で亡くなるまで無欲で描き続けた孤高の芸術家でした。熊谷芸術の根幹をなす自然への深いまなざしは、清流と緑の



写真上:熊谷守一
写真下:熊谷守一記念館

里・付知町で育まれたもののなのでしょう。平成八年(一九九六)にオープンした熊谷守一記念館には、画壇の仙人といわれた守一の作品が展示されていますが、その作品の一つひとつに自然への敬愛と力強い生命力がみなぎっているようでした。

熊谷守一を輩出し、伝統地芝居、史跡が残る中津川市は、文化・芸術の薫り高い街。東濃の歴史的遺産を求めて、旅してみませんか。



明治改修

第五編

横満蔵から始められた

木曽川下流改修

明治一九年の木曽川改修計画完成によって、翌二〇年、青鷺川分派口の横満蔵から改修工事が始まりました。当初計画は、三川の分流に限定し、付随する工事も最小限に抑えたものでしたが、それでも財政に大きな負担となる大事業でした。

三川分流に限定された改修区域

木曽川改修工事の着工を待ちわびていた流域の多くの人々は、濃尾平野を乱流する木曽三川の全ての地域が改修区域とされることを願っていました。が、改修区域は下流部に限定されました。

その理由は、木曽川改修工事概要に



明治21年に市販されていた改修計画図

「三川ノ中流以下災害ノ最モ甚シキ部分ニ限り計画シ其比較的被害ノ輕少ナル各川ノ上流ハ經費ト調査トノ都合上之ヲ后日ニ譲ルコト、セラレ其目的トスル所ハ高水ノ除害低水ノ改良即チ堤内悪水ノ改善及損舟ノ便ヲ増進スルニアリ」と記述されているように、財政の点から緊急を要する三川の分流を主眼として、これに附随して必要な工事のみに限定して改修計画が作成されました。従って、堤防の新築も最小限の区間に止められ、船頭平閘門や揖斐川導流堤なども当初の計画には入っていませんでした。

この頃は、憲法が制定される以前であるとともに、まだ国の税制度が確立されておらず不安定な財政状態にあり、明治二一年（一八八八）の税収見込みは六千四百七十三万円でした。したがって、限定された当初の改修計画においても、その必要経費は約四百万円と見積もられていましたから、国の財政にとっては大きな負担でした。

予算額は総額四百三万円

明治二一年（一八八八）五月になると、木曽三川改修計画図が民間によって「木曽長良揖斐三天河水利分流通改修計略全図」として販売されるようになり、改修工事の全貌が判るようになりました。

明治一九年（一八八六）、木曽川改修予算は、明治二〇年度（一八八七）から明治三五年度（一九〇二）までの一六カ年継続事業として、総額四百二万三千三百二十六円二二銭と決定されました。このうち、八九万三千二百七円八六銭九厘が岐阜・愛知・三重の三県で負担することとされました。

岐阜・三重県会では、水害が増加しつつある状況にあることから、竣工年度を短縮する要望が強く、政府は、明治二二年（一八八九）三月、この要望を容れて竣工年度を五カ年短縮して、明治三〇年（一八九七）とするにとしました。

歴史ドキュメント

因みに、各県の負担額は、岐阜県は、約五二万六千八百四円。愛知県では約一七万七千八百七二円。三重県では約一八万八千五百三〇円でした。

堤防工事は県施工

河川法が制定されていなかったこの時代には、河川改修に必要な費用の負担方法は定まっていませんでした。そのため、旧幕府時代からの慣例により、堤防の建設費用は、その建設される地先の負担とされました。この結果が、先の三県の費用負担となつて整理されています。

従つて、費用負担とは言いながら、各県の費用でもつて、各目の地域を守るための堤防を建設するわけですが、堤防の位置や大きさは、デ・レーケが作成した設計図に従っていました。また、堤防を築き立てるために必要な土砂は、国が行っている河道部分のしゅんせつ土砂が充てられました。

堤防費用の準備は、各県の事情により異なっていました。岐阜県では、明治二〇（一八八七）年五月に臨時県会を開き必要予算を議決しました。

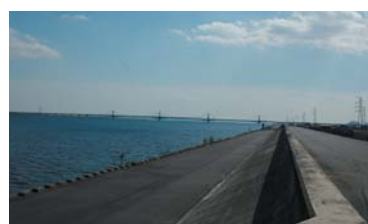
三重県・愛知県でも同様に臨時県会を開催しましたが、木曾川改修費については保留とされ、後日議決されました。

堤防工事は、国が行う河道工事の進捗に合わせて、三重県では明治二〇年に着工され、愛知県では、明

治二年（一八八九）、岐阜県も明治二六年（一八九三）にそれぞれ着工されました。

横満蔵から着工・山縣内務大臣視察

国による工事は、明治二〇年（一八八七）四月一日、青鷺川分派口の横満蔵地先で始まりました。



横満蔵地先の現況堤防

明治二〇年四月五日、山縣

有朋内務大臣は、四日市港に到着しました。郵便報知新聞によると「起工式」に出席のためとされていますが、「起工式」の実施については、その後も報道されておらず実態は不明のままです。



長島輪中からみた多度山

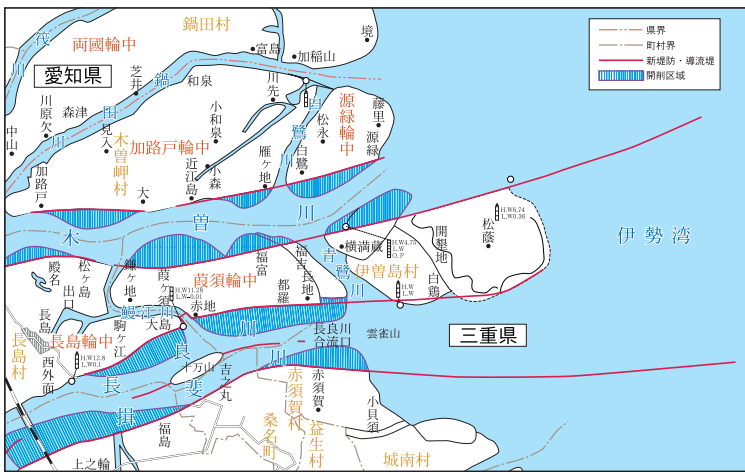
伊勢新聞によると、山縣大臣は、桑名に到着すると三の丸の内務省改修事務所を視察した後、木曾川右岸の横満蔵の工事現

場を視察しています。

四月六日、山縣大臣は早朝に桑名を出発して多度に赴き、午後、三県知事等を引き連れて多度山に登頂し、山頂において二万分之一の木曾三川改修計画図を広げて、施工地点を確認・展望しました。木曾三川の主要な地点には、大きな白旗が置かれて、山頂からの確認を容易にしたと伝えられています。

工事が始まったこの横満蔵は、青鷺川の海側にあり老松輪中の上流端に位置します。

新しい木曾川の河道を作るため、川の中に張り出していた松蔭新田を開削



河口部附近の改修計画図

し、掘り上げた土は、横満蔵地先の堤防や木曾川導水堤に使用されました。

旧輪中堤防の取り壊しや、新しい河道となる部分は、すべて人力により掘削が行われ、掘削した土砂の運搬はトロッキ（軽便鉄軌）により行なわれました。改修工事全体で使用されたレールは約七二km、トロッキは約四千台にのほりました。

また、低水路となる部分は、水面以下に掘り下げるため、仮締切り・水替えをして人力で掘り上げられました。

この横満蔵の地に、昭和六二年（一九八七）に挙行された「木曾三川水百周年記念事業」によって「明治改修着工地碑」が建立されました。



明治改修着工之地碑（横満蔵地先）

オランダからしゅんせつ船

河口部のしゅんせつには、オランダから輸入したポンプしゅんせつ船「木曾丸」によって行われました。木曾丸は、明治一九年（一八八六）にはオランダに注文製造されました。ポンプによって吸い取られた土砂は、

歴史ドキュメント



河口部のしゅんせつに活躍した木曽川丸

しゅんせつ船内の土砂溜(砂室・容積一九二m³)に蓄えられ、海域の捨て場まで運搬しました。

しゅんせつ

船の必要性

については、デ・レーケが明治一八年(一八八五)六月四日付けでエッセルに送った手紙に「木曽川にも新河口を開削するために、しゅんせつ船が必要になるでしょう」と書いていますから、この頃から準備が進められていたことがうかがえます。

木曽川導水堤の完成

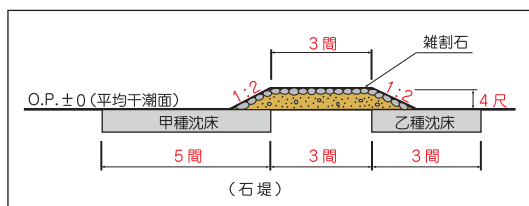
旧輪中堤の取り壊し土砂を利用した新しい堤防の築造は、三重県によって明治二〇年(一八八七)五月に木曽川導水堤の起点となる横溝蔵輪中の新堤防に着手され、同年度内に完成

しました。次いで、右岸側の葎ヶ須輪中および左岸側の源緑輪中の新堤防に着手されました。輪中の旧堤防が撤去され、その内側に、改修計画に沿って新しい堤防が作られました。

木曽川河口部右岸には、木曽川の洪水の流れを伊勢湾



木曽川導水堤の現状



木曽川導水堤の標準断面図

奥に導くための導水堤(導流堤)が計画されました。その延長は二千六百間(約四七二六m)、その内、陸地側の千一〇間(約一八三六m)は土堤防。海側の約二八九〇mは石堤構造で施工されました。

土堤防部分は、明治二〇年度内に完成し、石堤部分も明治二三年(一八九〇)一〇月に完成しました。

この土堤防部分には、かつては老松輪中がありました。万延元年(一八六〇)の高潮によって破壊され、復旧困難なため荒地地として放置されていました。土堤防構造とされたのは、木曽川改修工事の施工によって、老松輪中の復活が期待されたからです。が、松蔭輪中の地主達によって、明治三年(一八八八)に復旧工事が始まり、三百町歩(約三km)の耕地が再開発されました。これを記念した「再懇松蔭新田碑」が木曽川河口右岸に建立されています。

青鷺川木曽川口締切り

改修工事着工の翌年、

明治二一年(一八八八)には、右岸の青鷺川・鰻江川と左岸の白鷺川の分派口の締切工事が着手されました。

この頃の東海道は、

海岸線に近い陸路が主体となり、木曽川は弥富の前ヶ須から桑名川口町までの航路が一般的でしたが、この締切りによって、熱田の宮と桑名を結ぶ「七里の渡し」の内廻り航路が姿を消しました。

また、同時に着工された加路戸輪中および長島輪中では旧輪中堤が取り払われ、川幅が広げられて新しい堤防が作られました。このようにして木曽川河口部の三重県内の新しい堤防は、明治二三年度(一八九〇)までに完成しました。

愛知県内では、明治二二年(一八八九)に筏川の締切りに着手し、明治二四年度(一九〇一)にはこれの上流の五明・小島地先の築堤に着手し、年度内に完成させました。

河口部では「木曽川丸」によりしゅんせつが続けられ、その上流では人力によって河道の開削が行われ、築堤と共に次第に新しい木曽川が作られてきました。



青鷺川の締切堤防の現状



白鷺川の河道跡

築堤が完成した部分では、順次「ケレップ水制」が設置され、明治二四年度には、佐屋川合流付近から下流の木曽川はほぼ完成の状態となりました。

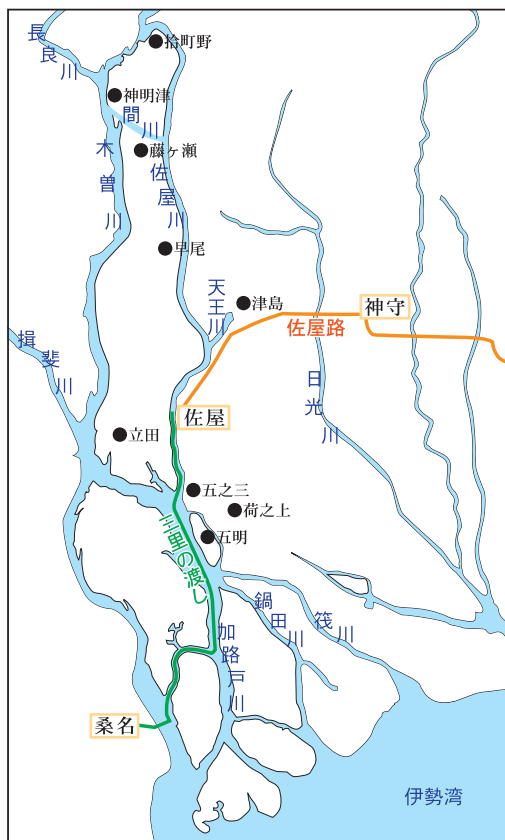
濃尾大地震による被害発生

明治二四年(一九〇一)一月一八日六時三十分、我が国の内陸地震としては最大級の濃尾大地震が発生しました。

このため、順調に進捗してきた改修工事、しばらくは災害復旧に専念することになりました。

参考文献

- 『木曽川改修工事概要』 明治四四年一月 内務省名古屋土木出張所
- 『岐阜県治水史』 昭和二十八年 岐阜県
- 『伊勢新聞』
- 『郵便報知新聞』
- 『木曽川下流改修工事の昔話』 名井九介
- 『デ・レーケの書簡集(未定稿)』 一九九九年三月 上林好之



木曾川に合流する。分流域点からすぐのところ、西の木曾川から佐屋川へ水を流す間川がある。また、江戸中期までは尾張側から佐屋川に足立川が合流していたが、天明期

論が生まれたのである。しかし、それを人と自然の闘いと言っただけでよいのだろうか。本稿では、木曾川の分流佐屋川を取り上げ、流路の変更に人々の関わり合いを考えてみたい。

二、佐屋川の特徴

佐屋川は、木曾川の拾町野から分流し、佐屋を経由して海東郡海西郡の境界を南下し、立田輪中の南端の梶島、尾張側で言えば五明村付近で再び



「佐屋川の流れと人々の生活」

林 順子 氏



林 順子 氏

林順子(はやしよりこ):2000年南山大学経済学部経済学研究科博士後期課程修了、博士(経済学)の学位取得。専門は日本経済史、特に近世河川交通史に通ずる。現在、岐阜大学、南山大学、中部大学などで非常勤講師を務める。『新修名古屋史』第三巻、『長久手町史』通史編などを担当。著書に『尾張藩水上交通史の研究』(清文堂 2000年)がある。



尾張名所図会

(二七八一〜八八九)に西光坊村で流路を留められて佐屋川から日光川に付け替えられた。佐屋川の川中では拾町野で一五〇間程、鵜ノ木で八六間ほど、雀ヶ森東で二五五間程、梶島の東で一三〇間程、対して木曾川の川中が給父村渡場で一八六間、下大牧村西で二〇〇間、

三、佐屋川の機能

地域社会において佐屋川が果たした様々な役割から、人々と川のつながりを考える。

塩田村太右衛門西に一六五間、葛木村渡場で一九七間、和田村西で三一〇間、下立田村猿尾西で二八〇間とある。全体として木曾川のほうが若干広くはあるものの、佐屋川もかなりの広さを誇っていた。実際『尾張名所図会』も、佐屋川を木曾川本流であるかのように扱っている。しかし、そこに描かれた佐屋川は、河川敷が非常に広く流路自体は細い。木曾川から流れ込む水が土砂をも運び込み、河床が上昇してしまった佐屋川の姿がそこにある。なお、合流地点の五明から東へは筏川、南には鍋田川、さらに南で加路戸川が分かれている。こうした支流

(一)まず、上下水運の航路としての役割がある。藤ヶ瀬村にある間川の佐屋川合流地点には川番所が設けられ、足軽二人が詰めて、交替で材木を積んだ船を改めていた⁷³。津島の材木屋が佐屋川や間川を経由して揖斐川付近へ材木を送るときにも、藤ヶ瀬番所の検閲を受けている⁷⁴。とはいっても、江戸時代を通じて佐屋川が輸送路として使われていたわけではない。津島村は年貢米などを船に積んで佐屋川を下していたが、それは足立川を日光川に付け替えるまでのことである⁷⁵。筏については、宝永二年(一七〇五)十一月、当時円城寺湊と犬山湊においてそれぞれ筏輸送を請負っていた赤河庄兵衛と神戸弥左衛門が出した願書の内容が、興味深い。彼らが言うには、最近木曾川の渇水によって、前野村から明津までの二〇町余りが浅瀬になり、その間でも前野村から拾町野付近までが特に浅く、尾張藩領木曾からの御材木筏も幕府領飛騨からの御用木筏も通せなくなった。両湊から多数の足を出して土俵を積むなどして水路を作り、筏に積んだ木も下ろして軽くするという方法が、一日一〇乗程度しか通過させられないような状態だった。同月七日の雨による増水で



三里の渡し跡

一、二日間木曾川を良好に通すことができたものの、再び同じ場所が浅瀬になってきたため、木曾川に筏が通せるようになるまでの間、佐屋川筋を通して欲しい。以上が庄兵衛らの願書の内容である⁷⁶。つまり、この頃筏の正式な通路として藩から認可されていたのは木曾川のみで、佐屋川は藩の許可無しに筏を通すことができない川だったのである⁷⁷。もともとその後、天保九年(一八三八)には、江戸城西の丸再建工事用の木曾材を佐屋川、揖斐川、加路戸川、鍋田川、筏川、その他枝川を通じて移送するように命じた触⁷⁸が出されている。宝永二年以後佐屋川が正式通路として認められたのだろうか。ちなみにデレーケの明治二年(一八七八)の『木曾川概説書』によると、五〇年前、すなわち一八二八年頃の佐屋川は平水で五尺(約一二五cm)ほどだったという⁷⁹。

(二)航路とえば、佐屋川には上下水運だけでなく川を横切る渡船の航路としての機能もある。佐屋川にいくつかある渡船場の内、特に佐屋と桑名を結ぶ渡船航路は、東海道熱田から桑名間の七里の渡しのバイパスである佐屋路の一部を構成するものとして重要であった。佐屋には二つの本陣と問屋、旅籠を備えた宿駅があり、さらには出入りする船やその貨客を監督する船番所、高貴通行者の接待などに利用された御殿、民政を司る代官所と、熱田とほとんど同じ施設が置かれていたことから、その重要性がわかるだろう。佐屋の渡しは、熱田の渡しよりも短い「三里の渡し」として知られ、不安定な海路を使う東海道を避け、遠回りながらも主に陸路を通る佐屋路を利用する参勤大名や女性旅行者も多くあった。幕末には將軍家茂、明治には明治天皇もここを通行している。とはいえ、筏川、鍋田川、加路戸川、揖斐川の四河川が交錯する不安定な流路をいかなばならず、佐屋川の河床上昇が更に航行を困難にした。明



佐屋代官所跡

和九年(一七七二)一〇月、佐屋船会所の上層部が江戸に出かけ、佐屋路を統括する幕府道中奉行に佐屋川の川浚いを陳情し、同年幕府道中奉行が実地調査を行い、佐屋は二五〇〇両の貸下げ金を受け

て利足を川浚い費用にあてることになったものの⁸⁰、川浚いの効果はなく、文化五年(一八〇八)に佐屋を訪れた道中奉行の役人が見たのは、すでに渡船場としての機能を失った佐屋と、川下の荷之上村焼田に仮会所を設けて中継をしている人々の姿だった⁸¹。文化一〇年(一八三三)の願書は、津島神社参詣に訪れた旅人は津島から佐屋まで五〜七町、さらに焼田まで三〇町余りも歩かされ、その悪説が道々に流布し、佐屋の衰微を早めている⁸²とある。文化五年頃から佐屋宿を焼田よりや下流の五明村に移転する計画が持ち上がったのも、無理からぬところである。しかし、住み慣れた佐屋を離れなければならない住民たちから移転反対の声が上がるのもまた当然であり、佐屋宿が団結して藩に移転を申請したのは三五年もたった天保一四年(一八四三)のことであった。幕末の混乱と財政難のなか移転計画は実現せず、この間に五之三村川平に設けられた仮会所が、明治四年(一八七一)の佐屋宿廃止まで機能し続けた⁸³。



佐屋の船着場跡



天王川跡(天王川公園)

(三)佐屋川独特の機能と言えるものに祭祀場としての役割がある。津島神社では六月に御葎(みよし)を天王川に放し「潮入流水」に任せて吉凶を占う御葎神事が行われる¹⁴。川の流れるみならず海の満ち干の影響を受ける佐屋川ならではの祭りと言えよう。

(四)佐屋川には用水としての機能もあった。安政五年(一八五八)の西保村、東保村、佐屋湊役人衆から佐屋代官所への願書によると、前年の出水により木曾川の水流が西に傾いて、佐屋川が絶水したため、用水を得ていた西保井組は田植えもままならぬ状況だといふ¹⁵。

(五)広く周辺地域に多大な影響を及ぼすという点で言えば、佐屋川の最も重要な機能は洪水時の放水機能であろう。明治三年(一八八〇)の笠松県から政府への上申書は、木曾川の水が長良、揖斐川へ逆流し洪水を引き起こす理由として、佐屋川への放水機能の低下をあげ、佐屋川の整備を願ひ出ている¹⁶。政府が三川治水工事に招聘したデ・レーケも、現在少しも水行がなく河道も完全に開通していないものの、洪水時に放水することは可能であると述べた¹⁷。しかし、明治一七年(一八八四)の本格調査を経て考えを変え、同二年から一〇年に及ぶ

工事の果てに佐屋川は廃川となり、佐屋川用水(現・木曾川用水海部幹線水路)のみが残された。



木曾川用水海部幹線水路

四、廃川の背景

佐屋川の水量の減少をもたらした廃川に導いたのは土砂堆積による河床上昇であるが、一概にそうとは言えない。

先出の安政五年(一八五八)の西保村らの願書¹⁸には、佐屋川の分流地点の拾町野に設けられた猿尾付近に砂が溜まって水を止めていたこと、立田輪中の山路村の間之川の入り口に洗堰を設けて、平時時における立田輪中への水の流入を防止し佐屋川の水位をあげようとしていたことなどが記されている。佐屋川には直接関係はしないが、天保一一年(一八四〇)八月の西保村ほか三ヶ村から佐屋代官所に出された、筏川の分流で三稲新田と三稲外線出新田の間を流れる鰯江川の廃川決定

の撤回などを訴える願書¹⁹も興味深い内容を含む。つまり、木曾三川一帯の治水工事の影響で木曾川の水が美濃側へ放水されづらくなり、また木曾川河口部の新田開発が進んだために筏川に入る水量が増え、さらに筏川河口部でも鰯江川や庄内川の影響による土砂堆積で海への放水が難しくなり、結果、平時時でも筏川の半分以上の水が傾斜の大きい鰯江川へ放水されるようになったというのである。河川の微妙な位置関係や、各所の新田開発、治水事業が水位に影響を与えることを示す好例と言えよう²⁰。

こうした水量の増減は、川の様々な機能の恩恵を受ける人々の死活問題に発展した。佐屋川の航路機能を利用する旅人や彼等に経済的に依存する佐屋の人々、また、佐屋川から用水をとる西保井組、そして放水機能に期待する周辺地域の人々は、佐屋川の維持に奔走する。ここで彼らが頼りにしたのが幕藩領主であった。佐屋川が幕府管轄下の重要幹線佐屋路の一部であったため、幕府も佐屋の人々の願いを受け入れ、巨額の貸付けをもって川浚いをさせ、佐屋川の交通機能の維持を図った。逆に、参勤制のなくなる明治以降、渡船航路としての佐屋川の意義は、政府のなかで失われた。政府は地域全体の治水面から佐屋川の存在意義を考えると、かくして佐屋川は廃されたのである。

菅豊氏は、近世の人々と川との関係を語るとき重要なのは、「自然と人間との関係」でなく、自然や資源を利用する「人々の間の関係」である²¹という。佐屋川の廃川を考えるうえで、航路、用水など様々な形で佐屋川の機能に頼る人々の間の関係性、そして何より、近世においては幕藩領主、近代においては明治政府との関係性も考慮する必要があるのではないかと。

■注

- *1 『愛知県史』資料編十六、史料一四四。
- *2 『八開村史』通史編、一九八頁。
- *3 同、一五一頁。
- *4 『愛知県史』資料編十六、九四七頁。
- *5 『愛知県史』資料編十六、史料三二四。
- *6 同、九四四頁の解説も参照のこと。
- *7 『佐屋町史』史料編一、史料一三八。
- *8 『新編立田村史』三川分流、第三節九木曾川概説書。
- *9 『佐屋町史』史料編一、史料五一三。
- *10 同、史料一六。
- *11 同、五四二頁。
- *12 同、史料五一二。
- *13 同、五四二頁。
- *14 『愛知県史』資料編十六、史料一四三。
- *15 『佐屋町史』史料編一、史料一三三。
- *16 同、史料一三四。
- *17 注②、参照。
- *18 『佐屋町史』史料編一、史料一三三。
- *19 『愛知県史』資料編十六、史料一四一。
- *20 鰯江川は明治五年(一八七二)に新田となった。『弥富町誌』村絵図編、一四四頁。
- *21 菅豊「川は誰のものか―人と環境の民俗学―」(吉川弘文館、二〇〇六年)近世コモンズの歴史、参照。

水のない谷

蛭川
ひろかわ

笠置山の中腹のヒノキ林のあたりに、ポツンと一軒だけ家が建っていました。ある暑い夏の日のこと。

この家へ旅の坊さんがやってきて、「こりゃ暑くてたまらん。

すまぬが水を飲ましてくれないか」と言うのです。

古ぼけた衣をまとった坊さんの顔には汗が噴出して、いかにも疲れた様子です。

ところが、水をあげるためには、少し離れた井戸まで行かなければなりません。

「この付近は水が少なく、差し上げる水もございません」

井戸に行くのが面倒だったこの家の人は、にべもなく断ってしまいました。

「ああ、そうかのう」

がっかりした旅の坊さんは、肩を落として足を引きずるように立ち去っていききました。

するとどうでしょう。

その夏は、来る日も来る日も一粒の雨さえ降らず、この家の裏の谷は、枯れ果ててしまいました。

それから毎年夏になると、この谷の水は石や岩の下をくぐるようになり、まったく水が流れません。

ほかの川は水が流れているのに、この谷だけはいつも川底がむき出し。

雨が降るとドドツと濁った水が流れますが、あつと言う間に、石の下にもぐってしまいます。



「旅の坊さんに水をやらなかったのも、この谷だけ水のない谷になってしまった」と村人はささやくようになりました。

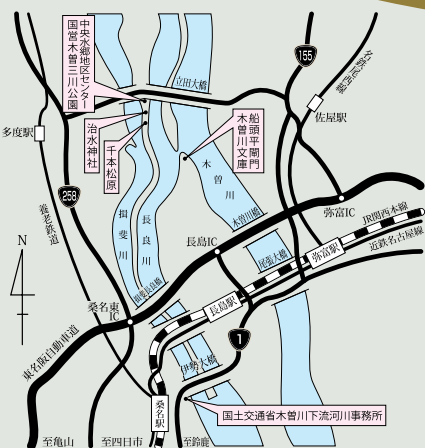
今でも天気が良い日が続くと、谷は石ばかり。上流や下流では水が流れているというのに、ここだけは水を見ることができない

ということなのです。

村の言い伝えによれば、

旅の坊さんはそのころ全国を行脚していた弘法大師だったと言われています。

木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平開門管理所・
木曽川文庫

〒496-0947 愛知県

愛西市立田町福原

TEL (0567) 24-6233



●表紙写真● 上左:紅岩 上右:付知峡 下:付知川

編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、岐阜県中津川市の皆様及び、林順子氏にご協力いただきありがとうございました。お礼申し上げます。

今回は、愛知県扶桑町を特集します。ご期待ください。

宛先「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>